

山づくりのおもしろさ

欽 吾さんが所有する山林の広さは70ha余り。その内訳は、ヒノキ43ha、スギ28ha、天然林5haです。手入れの行き届く範囲で、山の管理をしています。

昭和10年代から、欽吾さんの父・弘さんが手を入れてきたこの山林では、それぞれの樹種の適性に合わせた山づくりが行われています。

弘 さんから欽吾さんが受け継いだことは、技術的なことよりも、「山を見る目」と「山づくりのおもしろさ」だそうです。

山を育てるやりがいや楽しみを持って、絶えず山へ入っていった蓄積から、今では山の健康状態や、刻々とした変化を感じとれるようになってきました。

何十年という長い時間をかけて、山全体を観察し、適正な手入れを行うことで、山が少しずつ、自分の頭の中のイメージと重なっていく。「それが一番おもしろいんだ」と欽吾さんは話してくれました。



この山の約90%はヒノキですが、谷状のところには、30m程の高さまで見事に伸びたスギが植えられています。これは、土壌水分を好むスギの木の適性をいかした「適地適木」です。

手作りの道具

さや
靴
鉈を入れるケース。



枝打ち用の「鉈(なた)」 ↑↑↑

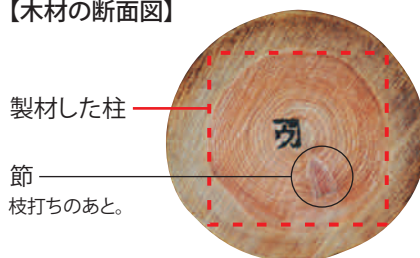
昔、地元の鍛冶屋さんでうってもらったもので、鉈の「柄」の部分と「鞘」は弘さんの手作り。

節のない材づくり

戦 前、弘さんは製材される柱を見て、「節が出てこんだら、きれいやろな」と思ったそうです。

節のない材をつくるには、5・6年生の目通り(目の高さ)5cm程度から枝打ちを始めます。木が若いと、節を内へ包み込む早さが違うのです。そのあと、20年生までの5年ごとに、2m間隔で合計4回の枝打ちを行います。

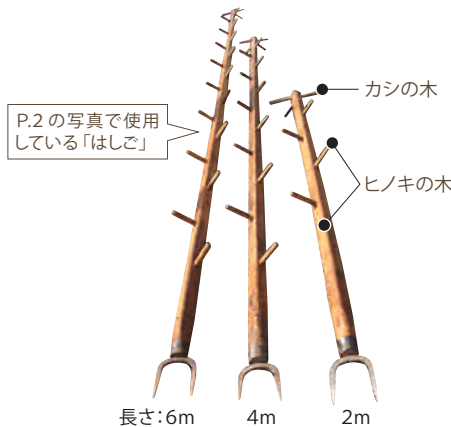
【木材の断面図】



枝打ちをした枝の切り口は木の成長過程で、中に包み隠されます。製材すると、節の部分が隠れ、節のない木材ができます。

6mのはしごを欽吾さんはすばやく登っていき、自分の背丈を含め、8mの高さの枝まで、あっという間に切り落としていきます。「トントン、トントン…」と、枝打ちする音がリズムよく響きます。

この徹底した枝打ちは、弘さんの山づくりの信念そのものであり、今でも欽吾さんによって、その信念は受け継がれています。こうして、上尾山林の木材は市場でも「節のない材」として高い評価を受けています。



枝打ち用のはしご ↑↑↑

足を乗せるステップの部分が、丸みのある形をしているので、地下足袋をはいた足の裏にしっかりと馴染む。

人工林の成長と手入れ

